不登校児のためのキャンプが参加者に及ぼす効果 :ＰＡＣ分析による検討

岐阜大学 教育学研究科 学校教育専攻（心理学）　山川久恵
岐阜大学 教育学部 学校教育講座（心理学）　宮本正一

The effects of camping experiences upon the non-attendance student and her mother using the PAC Analysis

Hisae YAMAKAWA
Graduate School of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1193
Masakazu MIYAMOTO
Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1193

The purpose of the present study was to examine the effects of camping experiences upon the non-attendance student and her mother using the PAC (Personal Attitude Construct) Analysis, and to discussed the factor for the change. Subjects were a 4th grader and her mother who participated on a 3-day camp taken place in 1999 for non-attendance students. PAC Analysis was administered for each of them on two months after the camp. They seemed to enjoy the camp and to increase their self-acceptances. These results suggested that the camping experiences had the valuable effects upon the non-attendance and their mothers. It seems that they experienced the success in interpersonal relationships and that the camp had acceptable environments.

Key words : non-attendance, camp, Personal Attitude Construct Analysis, self-acceptance
キーワード：不登校、キャンプ、PAC 分析、自己受容

不登校という言葉がメディアに取り上げられ騒がれるようになってすでに久しい。「学校嫌い」の理由により長期にわたって欠席する児童生徒は増加の一途をたどり、1999 年度には 30 日以上欠席した不登校児童生徒が 13 万人にのぼった。その数は実に小学生の 0.35%、中学生の 2.45%に相当していたのである。その後も依然、不登校児童生徒の数は増加傾向が続いている。今や不登校は深刻な社会問題にまで発展したといえる。

増加する不登校に歯止めをかけようと不登校についての研究は数多くなされてきた。その中で、不登校の態様の多様化や不登校児とその家族との関わりが注目されている。不登校児の成長発達を促し、援助をする上で、身近にいる家族は非常に大きな役割を果たすからである。中でも、親の養育態度の問題がよく取り上げられてきた。

しかし、その一方で、不登校児が家族に及ぼす影響についても指摘されはじめている。従来の「原因（親の養育態度）と結果（子どもの不登校）」という考え方ではなく、それらが相互に影響を与え合っているという円環的認識論の考え方（亀口、1998）が広まりつつある。

特に、母親と子どもとの関係が不登校に影響していることは早くから示唆されてきた。星野（1994）は、不登校がハーソブによって「家族神経症」と呼ばれていることを紹介している。不登校の家庭では子どものみならず、親、特に母親が多かれ少なかれ神経症的傾向を示すためである

という。星野（1994）によれば、母親が神経症に陥りやすいのは、不登校児をとりまく近隣社会との関係をつなげる役を一人で引き受けることになるからである。周囲との関係が悪化したり周囲から孤立したりして不安や悩みがますます増大するのである。母親が抱く代表的な不安に、対人不安がある。不登校児の多くは対人場面で強い不安や緊張を感じ、自我が傷つけられ自己受容が難しくなる。不安や緊張から逃れ、自我を防衛するため、不登校になりひきこもるのである。母親も子どもが不登校になると罪悪感、羞恥心などがつのって自己を受容できなくなり、近隣社会から離れ閉じこもってしまうことになる。そして、母親の不安は更に子どもの不安を呼び起こす。このように、親子間には相互作用が見られる。不登校状況を改善していくには、不登校児本人ばかりでなく、親への支援も必要なのである。

不登校児及びその親は、上記の例からもわかるように、一般に自己受容ができていないのではないかと考えられている。不登校児については、田中ら（1992）が、不登校児と通常登校児の自己概念を比較検討し実際に確かめている。SD 法（Semantic Differential Method）を用い、自己概念のうち現在の自分をどのように意識しているかという側面（現実自己）と、友達から自分がどのように見られていると意識しているかという側面（他者推測自己）の 2 つの自己概念の側面について実証的に調査した。その結果、思春期の不登校児は健常児群と比べ自己評価が低く、友達からも低い評価しか受けていないと感じていること、自己概念が否定的でマイナスイメージの大きい内容であることが明らかになった。これらの結果から、思春期の不登校児は自分自身を肯定したり、受容したりしにくいこと、他者に強い劣等感を抱きやすく自信がもちにくい状態にあること、他者に向かって自己開示や自己表現を行いがたい状態にあることを考察している。

不登校状況を改善するためには、このような状態にある不登校児、またおそらく同様の状態にあろう親の心の内面をケアしていく必要がある。そのために、現在までに実に多くの方法で不登校状況改善のためのアプローチがなされてきた。その中の 1 つが不登校児を対象としたキャンプである。

そもそも、キャンプは人間・自然・プログラムの三つの要素が相互に作用し合いながら行われる総合的活動であり、多くの貴重な教育効果が期待されている。飯田(1992)はキャンプに代表される野外教育の一般的目標として、①社会性の育成　②自己概念または自己認識の向上　③強化の拡充　④環境認知と理解、の４領域をあげ、また野外体験が参加者に及ぼす効果が、①環境に対する行動と理解、②社会的相互作用、③自己の発達、の３つに大別されると述べている。

キャンプの効果に関する研究は、特にアメリカにおいて盛んに行われている。1970 年以降には、自然環境の中で危険を伴うような冒険的野外活動を通じて、様々な困難やストレスを経験し、ストレスを克服することによって成功体験を味わい、成功体験の積み重ねにより自己概念の向上がもたらされるということを前提に、開発された野外での冒険教育（Outdoor Adventure Education）プログラムの研究が、新しい動向として注目されている。国内でもその研究を参考に飯田ら（1988）が冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容を測定している。その結果、このキャンプは参加児童に強いストレスを与え、自己概念を向上させる傾向があることを明らかにした。また、1992 年には、キャンプが自己効力感の向上に効果があることも確かめている。宮本･今井(1994)も 10 泊 11 日のキャンプにより、親密な友情の形成、個人的達成感、集団的達成感、代理体験、言語説得、情動喚起などの効力源により自己効力感が向上したことを報告している。

このように、自己意識・自己概念の向上、自己の発達を目的の一つとするキャンプは治療を目的としても実施されてきた。不登校児・不適応児を対象としたキャンプの実践もその一つである。すでに 1930 年代には研究が始まっており、1926 年にはクリーブランド児童相談所が、また 1929 年にはデトロイト特殊教育局が、学校不適応児・長期欠席児童を含む問題児の治療キャンプを行った記録がある。キャンプ療法の効果については、ロジャースも認めており、「全治療計画の一部としてキャンプを用いた精神科医やサイコロジストが異口同音にそれがたいていのケースにおいて非常に効果的であると述べているのはおそらく重要なことであろう。もし賢明に利用すればそれはセラピストにとっては貴重な方法であることは疑いのないところであろう。」（ロジャース、1966）と述べている。

日本でも近年活発にキャンプ実践がなされており、全国各地の青年の家などにおいて、大学や専門機関が企画したキャンプが行われている。その成果として、自己表現ができるようになった、再登校が可能になった、自己概念が向上する傾向がみられた、などの報告がなされている。

では、キャンプに参加することが不登校の改善につながるのはなぜであろうか。その要因を検討するためには、キャンプの参加者に見られる変容をさらに明確にしなければならない。しかし、その変容を明確にする方法が問題である。質問紙法では一面的な変容をとらえることになりがちであるという欠点が、事例研究では研究者の主観によるところが大きすぎるという欠点があるのではないかと思われる。適切な方法を考えていく中で、我々は内藤(1993)により開発された PAC 分析を新しい方法として注目した。

PAC 分析の PAC とは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略称である。PAC 分析とは、個人別に態度構造を測定するために内藤(1993,1994)によって創造・開発された研究法である。

分析は以下のような手続きで実施される。

①連想刺激の決定･･･テーマに合った連想をさせるための刺激となる文章を作成する。（刺激についてはその善し悪しで分析の行く末が決まってくるので十分に吟味する必要がある。）

②刺激による自由連想（カード記入）･･･被験者は提示された刺激に対して自由連想を行い、想起した順にカードに記入する。思い浮かぶことを全て挙げたと被験者が判断した時点で終了する。

③連想項目の重要順位づけ･･･想起順にならんでいる連想項目を重要と感じられる順に並べかえ、重要順位として順位をカードに記入する。

④各連想項目間の類似度評定による類似度距離行列の作成･･･被験者は各連想項目間の直感的な類似度を全ての項目間において７段階で評定する。この評定を実験者が重要順位に従った行列表に記入し、類似度距離行列を作成する。

⑤クラスター分析によるデンドログラム（樹形図）の作成･･･作成された距離行列をもとにクラスター分析を行い、デンドログラムを作成する。

⑥被験者によるクラスター構造のイメージや解釈･･･デンドログラムを提示し、被験者に以下の５つの内容を順に報告させる。 a) 形成されたまとまり（クラスター）ごとのイメージ・印象とその解釈、 b) クラスター間ごとの比較とその解釈、 c) 全体についてのイメージ・印象とその解釈、 d) 個々の連想項目についての詳しい説明、 e) 個々の連想項目についてのプラス、マイナス、ゼロでのイメージ評定、である。

⑦実験者による総合的解釈･･･実験者は被験者からの報告や感じとったことをもとにクラスターの命名を行う。そこからさらに被験者の内面がどのように体系化されているかを総合的に解釈する。

PAC 分析の特徴は、下位技法として、「自由連想」「多変量解析」「現象学的データ解釈技法」の３つを組み合わせた点であり（内藤、1997）、この３つから PAC 分析の利点を読みとることができる。第１に、自由連想を行うことによって、被験者自身のスキーマを通して得られた変数（連想項目）を採用し研究を進めることができる点である。研究者自身のスキーマに左右されることなく変数を決定できるため、被験者の独自性を排除せず、むしろ積極的に取り上げることが可能である。第２に、多変量解析の一種である、クラスター分析という統計的手法を用いて、個人にアプローチできる点である。第３に、提示したクラスター構造をもとに被験者に直接質問し解釈させていくことで、被験者と実験者が共同で被験者の内的世界を探索することができる点である。

以上のように、PAC 分析は、統計的な客観的データに基づいて被験者の内面を明らかにしていくことができる。これは、「個」へのアプローチが重要な問題となっている不登校の研究において、大変有効な手だてであると考えられる。

実際、この PAC 分析を用いてキャンプの効果を調査しようと試みた先行研究がある。松崎（1997）は「自主性を育てること」を目標としたキャンプを行い、サポーティブな関わりをするスタッフたちと経験するキャンプの効果を検討した。効果の検討は、キャンプに参加した不登校児の母親に対して PAC 分析を実施し、キャンプ前後の児童の様子を比較することで行っている。その結果、ある児童は自分に脅威をもたらす対外的なストレッサーに対して、退行という逃避手段から、相手を言語的に攻撃し立ち向かうという手段をとるようになった。また別の児童は、大人との信頼関係を取り戻し、自己コントロールもできるようになった。

この研究から、PAC 分析によって得られた母親の口述は児童の様子・内面を様々な観点から把握するのに有効であり、母親自身が意識していなかった点に気づき意識化できるという利点があることが示唆された。

上述の研究が示すように、PAC 分析は、被験者の内面を明らかにする上で有効であることが確かめられてきた。このことから PAC 分析は「個」へのアプローチが重要な問題となっている不登校児の研究において新たな接近法として価値が認められたといえる。同時に、キャンプの効果を測る方法としても有効な手段であることが示唆された。

そこで、本研究においても、キャンプの効果を測る上で PAC 分析を用いることとした。またそのとき、児童に対して直接 PAC 分析を行い、児童の言葉でキャンプによる変容をとらえることを試みた。さらに、不登校児だけでなく、子どもと同様の悩みを持ち、キャンプによる効果が期待される不登校児の親自身についても調査対象とした。

本研究の目的は、キャンプに参加した不登校児及びその親について、PAC 分析を用いキャンプによる変容を明らかにしキャンプの持つの効果を確認した上で、その要因を検討することである。

方　　法

被験者

平成 11 年 8 月に不登校児及びその保護者を対象に実施されたキャンプ「一番星みーつけたぁーIN 御嶽」の参加

者の内、小学校 4 年生の M 子とその母親。親子ともにキャンプへの参加は 3 回目である。

キャンプの概要

今回調査対象とした「一番星みーつけたぁー」キャンプは、2 泊 3 日の日程で岐阜県小坂町にある御嶽少年自然の家において実施された。「一番星みーつけたぁー」は、岐阜県教育委員会及び青少年自然の家が主催し、不登校児及びその保護者を対象に行うキャンプである。年度内に 4 回行われ、県内の青少年自然の家 4 所において異なったプログラムが組まれる。平成 10 年度からの試みで、本年度は 2 年目であり、御嶽での実施は 2 回目であった。

当日の参加者は小学生 20 名、中学生 13 名、及びその保護者 7 名であった。主な活動として、御嶽登山（雨天のため頂上は目指さず自然探勝路散策）、一番星を見つけよう、レクリエーション活動、思い出づくり等があり、ある程度決められた流れを持ったキャンプであった。しかし、内容、時間的にみて、通常行われるキャンプよりもかなりゆとりをもって行動できるように計画されていた。

キャンプでは参加児童生徒 5〜7 名が 1 班として活動し、そこに学生ボランティア 2 名（男女 1 名ずつ）、指導者 1 名がついた。他に、班にはつかない助言者、救護員、事務局員なども含め計 32 名のスタッフにより運営された。スタッフは安全かつスムーズに運営できるよう、事前に下見や打ち合わせを行った。またそこで、児童生徒と接する時心がけることについても確認しあった。例えば、教師らしさを出さないことがあり、具体的には、指示を出さない、せかさない、禁止をしない、などであった。スタッフも児童生徒と同様に、気持ちにゆとりを持つことが大切であるという認識がなされた。

実験期日および場所

1999 年 11 月。大学内研究室。

手続き

被験者（親、参加児童）への分析は筆者との 1 対 1 面接で実施し、面接中、もう一人は別室にて待機してもらった。

児童に対しては、実験にはいる前にキャンプに同行したボランティアや活動中の写真を見せ思い出を話し合うなどし、キャンプのことを思い出してもらった。保護者の場合は、児童生徒の様子を聞くことや保護者の悩みなど質問を受けるところから始めた。

PAC 分析については以下のような手順でおこなった。

まず、「キャンプのことについて質問します。キャンプと聞いたときどんな感じがしますか、何を思い浮かべますか。また、キャンプの前後にあったことでは何を思い浮かべますか。頭に浮かぶことを浮かんだ順にこの紙に書き出していって下さい。」といった内容の教示を与え、約 3×9 ㎝の紙片を渡した。ただし、児童によっては文字を書くことに抵抗がある子もいるようなので「思いつくことを順に言うだけで、紙に書くのはこちらでやってもよい。」ということも伝えた。被験者に思いつくことを言ってもらい、これ以上ないと被験者が判断した時点でこの作業を終了した。

次に、「言葉の意味やイメージが良いとか悪いとかに関係なく、〇〇さんにとって重要であると感じられる順に紙を並び替えてください。」という内容の教示を与え、連想項目の重要順位づけをおこなった。

続いて、クラスター分析に使用する類似度距離行列を作成した。「非常に近い」を 1 とし「かなり近い」「いくぶん近い」「どちらともいえない」「いくぶん遠い」「かなり遠い」「非常に遠い」までを 7 段階で示した用紙を提示し、以下のような教示を行った。「先ほどイメージしてもらった言葉を 2 つずつ見せます。〇〇さんの中でその 2 つが言葉の意味ではなく直感的にどの程度似ているでしょうか。心の中でどのくらい近いか離れているかを次の 7 段階で答えてください。」

上の手順で得られた類似度距離行列に基づき、ウォード法によるクラスター分析を行った。分析には統計ソフト「HALBAU（Ver. 3）」を用いた。デンドログラムとして出力されたその結果に従い、連想項目をいくつかのまとまりとして提示した。

被験者にそのまとまりを示し確認しながら、「こうして、〇個のグループにわかれているようです。今度はその一つ一つのグループを見たとき、どのように感じるでしょうか。まず、このグループを見てください。一つにまとめて考えるとどのように感じがしますか。また、どうしてまとまったと思いますか。」「どんなことがイメージできますか。どんなことが思い出されますか。」といった内容の教示を与えた。被験者の了解を得た上で話をテープレコーダーに録音し解釈の様子を記録した。それぞれのグループについて聞き終えた後、グループ間の比較を行い類似点や相違点をあげてもらった。教示としては以下のような内容であった。「まとまりとして別れることになった理由ともいえる相違点と、まとまりとしては別れたけれどこの点では似ているという共通点について教えて下さい」。さらに、「これだけ全部の項目を見たときに、全体から受けるイメージは？」との教示をし、全体についてのイメージ、解釈も聞いた。

最後に、「それぞれの項目から浮かんでくるイメージはプラスですか、マイナスですか、どちらでもないのゼロですか。」という教示を与え、各連想項目のイメージを評定してもらった。

結　　果

被験者親子の家族構成は、母（PAC 分析被験者）、兄（長男・大 1）、姉（長女・高 2）、M 子（次女・小 4・PAC 分析被験者）の 4 人である。両親の離婚により、父親は不在である。

PAC 分析以前に M 子自身から聴取した不登校のいきさつとその後の経過は以下の通りである。M 子は、2 年生の 3 学期頃から仲間はずれになっていた。理由は分からない。M 子の小学校では下校するときは何人かで帰らなければならないことになっており、いつも友達 2 人と一緒に 3 人で帰っていた。しかし、3 学期になってから 2 人の友達が M 子をおいて走って帰ってしまうようになった。3 年生から学校に行かなくなったが、3 年生の 2 学期から保健室登校をはじめた。4 年生も引き続き保健室登校をしている。音楽、体育、図工はクラスに戻り授業を受けている。2 学期には M 子のクラスが合唱コンクールに出場することになったため、合唱の練習がたくさんあった。楽しくがんばれたけれど疲れた。

母親から聴取した M 子についての話は以下のようなものであった。学校に行くことは M 子にとって非常にエネルギーを必要とすることである。帰宅したときには濃い疲労感が表れていることが多い。特に通常クラスに戻る授業が多いときや学校に 1 日中いた日にその傾向が強く、次の日はなかなか登校できない。

M 子に対する PAC 分析

M 子の印象は、明るく人なつこい感じである。面接者とはキャンプで何度も顔を合わせているため、甘えたり対等の友達のように接してきたりする。しかし、時々礼儀正しくなり、気を使っている部分があることをうかがわせる。

M 子がキャンプについてイメージした連想項目と、連想項目間の類似度距離行列からクラスター分析された結果は Table１と Fig.1 のようになった。

Table１　M 子の連想項目についてのクラスター

ｸﾗｽﾀｰ 1	1、 お友達ができたこと　（＋） 2、ボランティアのお兄さんお姉さん　（＋）
ｸﾗｽﾀｰ 2	3、たのしい（＋） 4、はじめてよふかし　（＋）
ｸﾗｽﾀｰ 3	7、お風呂がきれい　（＋） 6、「〇〇やりなさい」がなくていい（＋）
ｸﾗｽﾀｰ 4	5、どんなかんじなんだろう？最初は不安だった（＋） 8、休み時間が平気になった（＋）

被験者による各クラスターのイメージ・解釈についての口述は以下の通りである。ただし、M 子における分析では、小学校 4 年生である被験者の年齢を考えた質問の仕方をしたため、解釈については聴取できなかった。（　）内は面接者の言葉である。

クラスター1 のイメージ

「たのしい、たのしい感じ。」（他には？）「うーん、ほかにぃ？うれしい感じかなぁ。うれしいって言うか…、うん、やっぱりうれしくてたのしいかんじかなぁ。」（友達やボランティアの人に会えるからたのしいってことかな？）「うん、D ちゃん（筆者のキャンプでのネーム）と会えるとうれしいし。御嶽で T ちゃん（本キャンプで初めて出会った小 4 の女子）と友達になってなかよくなったし。」（そういえば手紙のやりとりもしてるんだったね。）「そうなの。T ちゃんからお手紙来たことあるし、次のキャンプは来ないって言ってたけど、A ちゃん（ボランティアの男子学生）からも来るの。A ちゃんとはねぇ、もう 1、2、…3、回お手紙きたかなぁ。」とたいへんうれしそうに話してくれた。

クラスター2 のイメージ

「おもしろい感じがする。」（おもしろい？）「うん、おもしろい。だって楽しかったし。おもしろかった。」（ふーん、他には？）「他に？うーん、あとは…えっと、わくわくする感じ。（わくわく？）「そう、わくわくする感じ。夜起きてみんなとお話ししてるときとか。」「全然眠くならなかったよ。おもしろかった。」

クラスター3 のイメージ

「うんとねぇ、うんとねぇ、なんかねぇ、ぽーっとして、ほっとする感じ。」（他には？）「えーと、それだけかなぁ。」

ここで「気持ちよさそうな感じだね。」と言葉をかけると、お風呂が気持ちよかったこと、夜のお風呂は怖かったこと、でもみんなで入って楽しかったことなどを話してくれた。

クラスター4 のイメージ

「うーん、…。」（今までのとはちょっと違うね。）「…んー、よかったことかなぁ。」（よかったこと？最初は不安だったけど行ってみたらよかったから？）「うん、そうなの。前はねぇ、なんかねぇ、うーん、てかんじだったけど、よかったこと。」（今は保健室にいるのも平気になったんだもんね。よかったね。）「うん、よかったよー。」

連想項目の補足説明

連想項目 8.「休み時間が平気になった」について少し説明を加える。連想項目をあげていく段階で M 子から聞いた話では、保健室登校を始めた 3 年生のころは休み時間がいやだったという。休み時間になると保健室に出入りする

子が多く、「何でこんなところにいるの、授業受けないの。」と聞かれたり、変な目で見られたりしたからである。しかし、4 年生になってから、特に 2 学期になってからは気にならなくなった。理由を聞くと、学校の児童たちが M 子が保健室にいることに慣れてしまい、M 子の存在を認めてくれるようになったからだということであった。

クラスター間の比較及び全体のイメージ

M 子の様子から、これ以上 PAC を続けると集中力もなくなり疲労が激しくなると考えられたのでクラスター間の比較、及び全体のイメージの聴取は行わなかった。

M 子についての総合的解釈

クラスター1 は、連想項目重要順位が 1 位と 2 位であり、キャンプにおいて非常に重要な位置を占めていることがわかる。1. 友達ができたこと、　2. ボランティアのお兄さんお姉さん、は共にキャンプにおいて出会った周囲の人々である。それについて、「楽しい、うれしい」とイメージしており、新たな人間関係をキャンプにおいて築けたことを喜んでいることがわかる。クラスター1 は「出会い」と命名することができよう。

クラスター2 は、3. たのしい、　4. はじめてのよふかし、とこれも重要順位順で上位の項目になっている。普段しないことをするというわくわくした気持ち、非日常の友達との生活に興奮している様子を表しているようである。クラスター2 は「非日常の期待感」と命名できよう。

クラスター3 は、7. お風呂がきれい、　6. 「〇〇やりなさい」がなくていい、という一見何も関係がなさそうな項目である。しかし、このクラスターイメージに「ぽーっとして、ほっとする」という言葉があげられており、ゆったりした気分になっていることが伝わってくる。温かくきれいなお風呂のイメージと、何かと厳しく言われない自由な環境のイメージは、心身共にリラックスしほっとした解放感に浸っている様子を想像できる。クラスター3 は「解放感」と命名できよう。

クラスター4 は、クラスター1 から 3 がキャンプ中のことを連想しているのに対して、キャンプ外における連想をしている。連想項目 5. 最初は不安だった、というキャンプの初参加以前の気持ちと、連想項目 8. 休み時間が平気になった、という学校での気持ちである。最初は落ち着かないがキャンプにおいてすぐ慣れることができたように、保健室登校もやがて慣れることができたというつながりが連想できる。周りから認められることによる落ち着きも表しているようである。クラスター4 は「認めによる心の平穏」と命名できよう。

不登校状態に至ったきっかけが友達とのトラブルであった本児にとって、人間関係は非常に重要であると思われる。学校での生活が非常に大きなエネルギーを必要とするのは、本児が人に極端に気をつかってしまうからだと考えられる。キャンプに来ている本児の普段の様子からはその様には思えない。ただ時折、大して問題ではないと思われる言動に対して「すみません、ごめんなさい」と急に礼儀正しく謝るなどの過剰な反応がみられ、気をつかっている様子がうかがえた。しかし、キャンプ中は普段より気を使わずに生活できたようである。項目 6. 「〇〇やりなさい」がなくていい、からわかるようにキャンプでは大人に気を使う必要がなく、解放感があったからであると思われる。

また、クラスター1 にあった、人々との出会いも関わっていると思われる。教師とは違い、友達のようでまた少し違う、ボランティアは自分を認めてくれ、気遣ってくれた。初めて会った子であるにもかかわらず一緒に活動し友達になることができた。キャンプでは、本児が自分に自信を持ち生活できる環境になっていたと考えられる。そしてクラスター2 でみられた非日常の生活を楽しむ様子から、いつもとは違う生活と共に、いつもとは違う自分も受け入れ楽しんでいるようにも思われた。

母親に対する PAC 分析

被験者の印象としては、比較的おっとりしていて、やさしい感じであった。話し方もやさしく、もの静かで柔らかい印象を受けた。

母親のキャンプについてイメージした連想項目と、連想項目間の類似度距離行列からクラスター分析された結果は Table 2 と Fig.2 のようになった。

Table 2　母親のキャンプに対するクラスター

ｸﾗｽﾀｰ 1	1、いくときわくわく（＋） 6、山歩き・緑　（＋） 4、自分も楽しんでることを別のところで子どももやってる（＋） 2、笑顔（＋）
ｸﾗｽﾀｰ 2	3、人の輪　（＋） 5、泊まった部屋での、いろんなお母さんとの小さなでも暖かい会話や大きな重い会話（＋） 7、教師的でない先生方のやさしい顔　（＋）

クラスター1 のイメージと解釈

「外で、体を動かしてる･･･、一緒に、だれかと･･･、外で皆で楽しくというとあれかしら、外、自然の中で･･･そのような感じですね。」

連想項目の補足説明

連想項目 4. 「自分も楽しんでることを別の所で子供もやってる」についての母親の説明は以下の通りであった。「あんまり普段（体を）動かせないしっていうのもあるし、

体を動かして、自分が楽しんでる事をべつのところでもこのままやってて、お互いに、子供も楽しんでいそうで、私も楽しんでやってる。」「もちろん、やっぱりあのグループに子供が入っていけなかったら、できないですよね。」「そう、だから、あそこに入っていけなかったら、まだその前の段階だから、その時期にはなってないでしょうし…」

クラスター2 のイメージと解釈

「中で話している場合の、それぞれのあれかな、断片なのかな」「これ（クラスター1 をさして）が皆で動いてるってぐらいで、これ（クラスター2）は皆で語らってるって感じの、語らってるっていう感じかしら。人の輪はこっち（クラスター1）かと思うけど、なぜだ？」（人の輪は動いてるほうかなって感じですか。）「動いてるほうの、最初に思い浮かべた時はね。何かしてる時のかんじ。おちつくとか」

連想項目の補足説明

連想項目 2. について、「この笑顔というのは一番どこで思い浮かびますか。」という質問をしたところ、「やっぱり何かやってるとき。子供とか、子供と一緒にやる場合は、親も同じになって、あの、先生も親も、心からというか、体から。」

連想項目 7. について、項目をあげるおり、土岐（初めてのキャンプ地）の指導員は教師らしさがあって嫌だったとの発言があったため「土岐（初めてのキャンプ地）の先生は、まだ先生的なところがあったから余計にこのように（連想項目 7）思ったのですか。」とさらに詳細を尋ねた。母親の両親は教員だったとのことで、小さい頃から非常に嫌な思いをしてきたとのことである。「私は教師好きではないんですよ、過去のことでこだわりが在るんですよね。」と前置きしてから、教員は自分が言った事を子供が聞いてあたりまえという考えをする、と話し始めた。言うことを聞かないと、とんでもない子とみなし、外れてる子、ちょっと違う事してる子、いっしょにやらない子を駄目な子とみるのが嫌だという。「私が外れた子だったのかもしれない」とつぶやいていた。また、「教師の顔は仮面みたいなものですよね」と言い、「子供はわかるといいますか。敏感に感じ取ってしまいますよね。」と教師の口先だけの態度について批判した。

クラスター1 と 2 の共通点、相違点

「どうなんだろ？自分ではわからない。みんな似通ってるんじゃないかって思って書いてたから。」（では共通点は。）「一人じゃないってことですかね」「一人での行為ではないってこと、多分、思い浮かべた時。いつも、複数とか、対話っていうのもあるけど、誰かと信頼関係が在って、（一緒に）いて全然嫌な人とじゃなくって」

全体のイメージ

「全体？･･･。これから受けるイメージ？･･･。･･･生きていけるってことかな･･･、そういうものがあれば･･･」「あるとすれば生きていけるっていうようなイメージで、そうね、しかも前向きにって言うか、生き生きと生きていけるってイメージかな、自分で見たときにね」

その他の補足質問

（キャンプの前は、どんな感じだったんですか。）

「こういうあの、喜びがなかったっていうか、忘れてたっていうか、そういう状態だったですね、別に子供のせいじゃないと思うんだけども、それもあいまって」

（キャンプに行ってお母さん自身が楽しんでることがよくわかります。）

「本当にそうです、キャンプの時に本当にそういう、ふだんでも困ってる事や、落ち込んだ思いなんかを、そのときだけでいう場がなかったのを。あんなに全部全部、心の中をくみ出して、そのまんま、出すだけ出しちゃえたのは、初めてじゃないかな、よっぽど親しい人にいう以外は、知らない、たくさんの前で自分の本心をいったりとか、初めてだと思いますね」「それでなんか他のお母さんそれぞれもなんかこう、認め合えちゃってるから、ほんの何気ない会話でも、それこそ、挨拶程度のおはようだけでも、今日はいい天気になりそうね、だけでも、なんか心に響く、普通の会話だけじゃなくて心に届く会話だったって私は思ってます。」

（自分ではキャンプに何回か参加してみて気持ちの変化ありますか？）

「あのね、もしかしたらあの、これははっきりしないですけど、もしかしたら、お母さん、他のお母さんとも、長い長い話し合いでとか、聞きたかった確信を先生に聞いてみたりだとか、後すごくリラックスできたのね、ここで自分で出しても良いんだって思って、すごくリラックスできて、自分のことを話す事ができて、あそこで、命の洗濯じゃないですけど、あそこで自分のためてる事を、2 泊 3 日もあるよね、話せなかったことを話せて、で、わかってもらえて、相手のお母さんのいってる事もわかるって状況、2 泊 3 日の中で、それで、なんだろその、よどんでるものっていうかしら、そういうものが徐々に取れたのかもしれないとおもうけども」「そう、他の家族にも受け止めてもらえなかったし、もちろん学校や先生にも、もちろん良くしていただいても、そこまでは、言えないし、そういうことまでも洗いざらいね、お母さんどうし、なんかの話の中で…」「そうやって、軽くなって、自分もちょっと動きが取れるようになったし、気持ちのバランスも保てるようになったんじゃないかしら」

母親についての総合的解釈

クラスター1 は、「山歩き・緑」に象徴される「自然」のイメージが強いようである。自然の中ですごすことが普段なく、非常に気持ちがよいという発言もあった。親子そろって自然の中ですごせることがさらにうれしさ、楽しさを増しているのであろう。クラスター1 は「キャンプでの楽しみ」と命名できよう。

クラスター2 は、被験者のイメージでは室内とのことである。室内で人々が話をしている様子が思い浮かぶ。クラスター1 が外のイメージであったことを考えるとその点で対照的である。被験者の言う「外」と「内」とはイメージした場所なのであるが、そこからさらに「内」のイメージが、心の中の部分を示していると考えることもできよう。項目の補足説明にもあるが、このキャンプで心の底にあったものを全て吐き出すことができた。周囲の人を信頼することができ一体感を味わっているようである。心の内で感じとることや心の底から思うこと、心の中での変化や喜びが表れたクラスターである。よってクラスター2 は「内なる感情の充実」と命名できよう。

全体のイメージとして、被験者は「これがあれば生きていける」と表現している。被験者は自然に親しみ、まずそこで生きる力を得ることができたと考えられる。雄大な自然に囲まれたとき、人は命を感じることができるからであろう。

さらに、「人」の存在が生きる力になる。被験者は今まで他の人に話せず苦しんできた心の奥底までキャンプにおいて話すことができた。それは同様の境遇にある者同士、お互いを認めあえると感じたからであろう。共感しあえる仲間に巡り会ったことで、また信頼できるであろうスクールカウンセラーが話を聞いてくれたことで、自己開示にいたったのだと考えられる。苦しみ、悩みを話し、わかってもらえることで気持ちは軽くなり、生きる力になるのであろう。共感しながら話を聞いてくれる信頼できる人が必要なのである。

また、「人」は話をした人だけに限られない。周囲の人間すべてが影響してくるのである。被験者の場合「教師的でない先生方の優しい顔」と連想されたように、自分と子供を見守る人々にも、自分たちを受容してもらえることを望んでいるように思われる。被験者は特に教師に対して批判的であった。他の子と違う子や自分の言うことを聞かない子を駄目な子と見なすことに嫌悪感を感じている。自分の両親が教員であったためだと被験者は言う。教師は仮面をかぶっているとの言葉もあり、その仮面にまず子供は敏感に反応し被験者自身も何となく感じとってしまうようである。のびのびと自己を解放するには、受容やゆとりを内面から醸し出してくれる人が必要であるというのだろう。そして、みんなが笑顔でいることができ、心の底からの笑顔を見せ合うことができることで次への力となっていくように思われる。

ここでまだ「人」の中で、被験者にとって最も大切な存在が残っている。自分の子供である。自分の子供が楽しんでいるからこそ楽しめる、自分の子供がゆとりがあるようだから自分もゆとりを持てる、という思いがあるものと考えられる。それは、「子供が（みんなの）なかに入れていなかったら（楽しむことは）できないでしょうね」という言葉として表されているようである。

前向きに生きていけるという発言のもととなっているのは、キャンプで出会ったような共感してくれる仲間や受容してくれる周囲の人々の存在であると思われる。そして、子供の幸せな姿である。更には、もっと大きく自分たちを包んでくれる自然というものの存在もあったと考えられる。

考　　察

M 子にとって一番大きかったキャンプでの出来事は人間関係がうまくいったことであるようだ。友達やボランティアが連想項目の 1 位と 2 位を占めていることからもよくわかる。また、それは母親にとっても同様であった。連想項目の解釈、補足説明などから共感しあえる人同士の関わりが大きな意味を持っていることがわかる。M 子は友達とのトラブルの経験もあってか、人と関わりを持つ際非常に気を使ってしまう。母親もまた遠慮して言えないことが普段からたまっている。親子それぞれの持つ問題は似ているように思われる。その似ている問題に対して親子共に解決の糸口となるべきを見つけることができたようである。

それは、共感できる仲間と受容的なキャンプの雰囲気によって促されたと考えられる。親子は、特に母親は自分が楽しく行っている活動を子供も楽しんでいるということに満足感・安心感を覚え、さらに楽しむことができる。共にキャンプに参加することで時折お互いの楽しんでいる様をみることができ安心することができるのだろう。これは一種の相互作用であり、相乗効果であるといえよう。

親子共に、好ましい受容的な人間関係を作り、自分に自信を持つことができた。キャンプの効果にも親子の相互作用がみられたといえよう。

また、M 子の場合がそうであったが、友達同士のトラブルが原因で不登校となることは多い。そのトラブルが終結しても登校できないのはトラブルにより対人不安が強まったせいではないかと考えられる。PAC 分析の過程で母親から聞いた以下のような話がある。月日が経っても学校へ行き友達と顔を合わせることができない子どもに母親が理由を問いただしたところ「（友達が）憎いんじゃない、

憎いんじゃないのよ、お母さん」と言い、それ以上は話さず、いつも「わからない」と返事するだけだという。自分でも行けない理由がわからない、言葉にできないのだろうと考えられる。このことからもわかるように、特定の人が嫌だと簡単に片づけるわけにはいかないようである。心の底に問題を抱えていると考えられ、それが対人不安なのではないかと推測されるのである。

対人不安が強く人付き合いが苦手であると、人間関係をうまく作れず周囲に溶け込めない自分に自信がなくなるようである。周囲に溶け込めないということは、友達に自分の存在が受け入れられなかったことを示すからである。他者に受容されないことで自己を受容できなくなるようである。また、友達になじめない自分の存在は異質であると思い存在意義を否定する場合もあるようだ。

キャンプは上述のような対人関係の面での問題に効果があり、変容が見られたように思われる。M史君の場合は実際に他の不登校の子ども達に会ってみて自分と同じ子がいることを納得し自分の存在を肯定できたのであろう。そして、そこで集団生活ができたという自信が登校への障壁を取り除いたのだろうと考えられる。

M子さんの場合は、親密な人間関係を持つことができ、特に同年代の友達を作れたことで自信がつき自己を受容できたようである。また、周囲の受容的な環境により安心して活動できたことも、自己を受容できた要因であると考えられる。

キャンプ後のアンケートからも「友達ができてうれしい」「仲のいい友達と話すことがすき」という言葉が見られる児童生徒が多く、対人関係に少なからず自信がついたのではないかと思われる。

以上のような事例から、児童生徒はキャンプに参加したことで以前より自己を受容できたのではないかと考えられる。

対人関係とは少し異なるところにも効果は存在する。キャンプには乗り越えなければならない課題がいくつか設定されていた。課題に取り組むか、取り組まないかは本人の意志に任された。例えば登山があり、本研究では紹介できなかったが PAC の事例の中で母親が「子どもが達成感を求めているようでしきりに山に登りたがっていた」という話をしてくれたことがあった。達成感を得ることは自信につながるであろうと思われる。自分にはその課題をこなす力があるのだと感じ、自己効力感が大きくなる。その場合、自己は肯定しやすいであろう。達成感、自己効力感は自己受容につながっていくと考えられる。

キャンプへの参加は自己を受容するのに大きな役割を果たすといえた。自己を受容することは自分に自信がつくことでもあり、対人関係における不安も弱くなると考えられる。不安が弱くなることで、人との関わりがスムーズになり社会生活を営む上での問題が一つ解決されることになると思われる。

そしてそれは不登校の改善につながるものであると考えられる。「不登校の改善」とは、登校できるようになることだけではないはずである。登校できるようになり不登校状況が改善されることは望ましい結果である。実際、本研究において対象としたキャンプを終えてから、登校できるようになった児童生徒もいた。しかし、なぜ登校しなければならないか。その理由に知識をあげるとすればそれは自宅でも可能だといえる。学校でしかできないこと、それには社会性・道徳性・集団性などを身につけることがあげられる。社会に適応する能力を獲得するためなのである。不登校になるとその能力を身につけることが難しくなると考えられる。しかし、人との関わりがスムーズになることは社会に適応する能力の一つであり、それを身につけることができたということは登校した場合に得るものの一つを身につけたということである。ならば、人と関われるようになったことやその根底にある自己受容の向上を不登校の改善と呼んでもよいのではないかと思われる。よって、キャンプには不登校を改善するための効果があったといえると考える。

これは母親に自主性がでてきたことを示している。自分を主体に考えようとする気持ちが伺える。これは生きることに前向きになったととらえることができるのではないだろうか。このように主体性がでてくる例は合宿を通しての変革を PAC 分析の実施により探った研究において、対象が児童の場合に確認されている（柳平、1999）。
M子の母親による PAC 分析において「生きていける」というイメージが得られたこととつながりがあるように思われる。「生きていく」ことができると感じたのは自己を受容できたことと関係があると考えられる。よって、母親にも児童生徒と同様に自己を受容できるようになる効果が期待できると言える。

全体的なキャンプの効果

ここまでに、個々の例をあげ、主に自己受容の観点から保護者・児童生徒へのキャンプの効果、およびその相互作用について検討してきた。自己受容度を測定する質問紙の結果から、キャンプ後の自己受容の向上が確認されてきた。よって、上述してきた参加者個々それぞれについてみられた自己受容の向上は、キャンプの参加者に一般的な効果と考えることが可能である。

ここで、自己を受容するに至った要因を振り返ってみると、受容的な環境の中でこそ得ることができた要因が多いことに気づく。

保護者にとっても、児童生徒にとっても、共感できる仲間との出会いは自己を受容する上で大切であった。自分が受け入れられているという思いが重要であったのだろうと思われる。自分を受け入れてくれるのは仲間だけではなく、周囲のスタッフ達がいた。もともと対人関係の苦手な児童生徒達が多いことから、人間関係の形成には気を配る必要があった。先に挙げたように、仲間よりボランティアに接近し関わりを求める児童生徒も数名いたようである。ボランティアは友達として、兄や、姉の立場として児童生徒を受け入れていくことが必要であり、その態度に児童生徒は安心感をもったと思われる。M子、H美、H男の PAC による事例にもそれは現れている。登山など普段ならすぐにあきらめるところを、仲間やボランティアが頑張る姿を見て自分もと思い、ついには達成できた例もあった。また、指導員の関わりも重要であったようである。

「教師的ではない」とM子の母親に表現されているのは、うるさくしからず、ゆとりを持たせている方針があってのことと思われる。M子もそのような環境に「ほっとする感じ」というイメージをあげていた。さらにM子の母親は「教師的でない」という言葉に受容的な態度を含ませているようであった。キャンプでは、みんなと違う子、人であっても受け入れてくれるという安心感があったようである。それにより子どもの活動についても心配せず、キャンプを楽しみ、親や指導員の間で自己開示をして受け入れられることで自己を受容できたのだと考えられる。

今までの例から対人関係における自信、達成感、自己効力感等も受容的な環境に支えられてきたと言えるであろう。受容的な環境が自己受容を支える基盤となると考えられるのである。

受容的な環境

受容的な環境が大切であろうという考察を得るに至ったが、これは松崎（1997）の研究を確かめた形になったと言えるだろう。松崎はキャンプを行う際にスタッフがサポーティヴな関わりをとれるよう STEP プログラムによるトレーニングを受けさせている。STEP プログラムの特徴は、ほめる代わりに「勇気づけ」を、叱る代わりに「自然な結末」や「論理的な結末」を経験させるなどと言った点で上下関係でなく横の対等な民主的な関係を求めている点にある。トレーニングを受けるのと受けないのとでは子どもに対する関わり方がかなり違ったという。松崎は自分を安心して表現できるサポーティブな関わりに最初から注目しその効果を確かめるためのキャンプを行っていたのである。

本研究におけるキャンプは松崎の研究のように統制された環境ではなかった。キャンプに批判的な質問紙が送られてきたのはそのような理由もあるのかもしれない。ある母親からのキャンプ後のアンケートには「帰ってきた娘が、「だってみんな先生だったんだよ」といった一言が印象的です。」と記されていた。後はほとんど白紙での返却であり子どもの質問紙にいたっては返却されなかった。この児童は受容的な環境にあるといえなかったのではないかと推測される。

参加者の多くに自己受容を向上させる効果があったことを確かめてきたが、やはりすべての人について効果が言えるわけではなかった。また、人によって得た効果に差はあったことと思う。その要因の一つが上記したような環境の統制を行わなかったことに関わっているのではないかと思われる。

キャンプというと、従来の研究の多くは困難な課題を設定し、それを乗り越える達成感に重点を置いていたと思われる。とくに飯田ら（1988、1990、1992）の実施したアドベンチャーキャンプに顕著である。

飯田らは、相談機関などが行うキャンプは日程やプログラムの面で真のキャンプといえないのではないかといっていた。しかし、不登校児を対象としたキャンプでは、日程やプログラムの面よりもスタッフ等のキャンプにおける環境設定が重要であると考えられる。受容的に支える環境があってこそ、より達成感を味わえるのではないかという考察が本研究ではできたからである。

日程やプログラムについては、実施してみなければわからないところがある。しかし、実際に２泊３日のキャンプでもキャンプの効果として自己受容の向上が言えた。環境を整えることのほうが日程の内容よりも先決なのではないかと考えられる。そして、本研究においては松崎らの視点も加える必要があることを示唆する結果となったと考えられる。

今後の課題と思われる点は次の 3 点であった。

第一に、本研究において、不登校児のためのキャンプの効果として自己受容の向上が保護者、児童生徒の両方に確認された。しかし、様々な要因が介入していると考えられ、その要因を明らかにすることはできなかった。考えられる要因について整理し確認していくことは今後の課題となるであろう。

第二に、キャンプの環境の一部として重要視されるスタッフだが、トレーニングされていない場合はうまく受容的な関係を子どもに対してとれないことである。しかし、スタッフとしてキャンプに参加すること自体トレーニングであるとも言える。子どもと、親と向かい合い生活することで次第になにが求められているのか学び取っていけるものと考える。

第三に、PAC 分析の解釈についてである。PAC 分析は実験者の主観だけに偏らず、また被験者の内省だけに頼る

のでもなく、被験者の心理について２者の共同作業により協力的に分析を進め、被験者の内面に迫っていけるものであると思われた。分析終了後、被験者の方に「改めて考えてみることができてよかったです。新たに気づくこともありました。」といっていただけたこともあり、PAC 分析のカウンセリング的側面についても実感できた。

しかし、解釈の点で、やはり実験者の枠組みにより解釈・理解しようとしてしまうという欠点があった。また、内藤（1997）は「データを要約するだけでなく、既存の理論や知見を参照しながら意味づけるようにし、現代の学問の最先端の水準で解釈する」ように言っているが、それだけのバックボーンが実験者になければ、意味づけをしたり意義を見いだしたりするところが十分にできず、考察に広がりや深みを持たせることができない。実験者自身の力量の問題を痛感した。実験者が力を付けることが必要である。

実際 PAC 分析は被験者と実験者の人間関係ができない場合は困難である。それは従来の研究及び本研究での PAC 分析からも明らかであると思われる。特に信頼関係がある程度重要になってくるようである。また、踏み込まれたくない内面の問題にかかわってしまうこともある。よって、場合によっては PAC 分析は不適切な手段であることがいえるのである。場合によっての臨機応変な態度判断が望まれる。

今後の展望

キャンプのもたらす効果の要因については様々に解釈できるため特定できなかったが、受容的な環境が大きいのではないかと考えられた。今後、要因を特定するために、キャンプの環境を統制することが考えられる。環境を特定し、キャンプによる効果を確かめることができたなら、不登校のためのキャンプをより効果のあるキャンプに変えていくことができると考えられる。またそれはキャンプに限らず、日常の学校相談の場面などにも応用できるのではないだろうか。不登校の改善に効果のあると思われる要因を普段の生活の中でも周囲が取り入れるようにしていくことが、不登校である児童生徒にとって、またその保護者（特に母親）にとって、望ましい対応となっていくのではないかと考えられる。またさらに研究を進めることで、不登校の増加に歯止めをかけるための対策に発展させていくことが可能であると考えられる。

引用文献

星野仁彦　1994　登校拒否の子どもをもつ母親の不安と悩み(教師と親が読む--不登校･登校拒否ﾊﾝﾄﾞﾌﾞｯｸ--親子･家族関係から考える不登校･登校拒否)　児童心理, 48,　15,　40-49

飯田稔・井村仁・影山義光　1988　冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容　筑波大学体育科学系紀要 11, 79-86

飯田稔・坂本昭裕・石川国広　1990　登校拒否中学生による冒険キャンプの効果　筑波大学体育科学系紀 13,90-

飯田稔・関根章文　1992　キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果　筑波大学体育科学系紀要　15, 93-102

亀口憲治　1998　家族心理学研究における臨床的接近法の展開　The Japanese Journal of Psychology, 69,　1,　53-65

松崎　学 1997　サポート介入による個人の対処行動の変容過程に関する研究　科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書

宮本正一・今井由紀　1994　集団宿泊体験を通しての自己効力感の変容　岐阜大学教育学･心理学研究紀要　12, 71-83.

内藤哲雄　1993　学級風土の事例クラスター分析　実験社会心理学研究,　33,　111-121

内藤哲雄　1997　PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待　ナカニシヤ出版

ロジャース　1966　問題児の治療　岩崎学術出版社

田中勝博・原野広太郎　1992　思春期の登校拒否児および健常児群における自己概念に関する研究　Bulletin of Counseling and School Psychology, 30, 8-15